

# 赤れんが 通信

Top Pick 1.

さっぽろ雪まつり  
国際フェスティバル

Top Pick 2.

赤れんが庁舎の歴史

Top Pick 3.

世界ふれあい広場



生まれ変わる赤れんが庁舎

# さっぽろ雪まつりと 赤れんがの物語

2025年2月4日、第75回さっぽろ雪まつりが大通公園で開催されました。国際交流員3名が会場を訪れ、札幌の冬で最も賑やかなイベントを体験しました。また、大通7丁目の「北海道庁旧本庁舎・赤れんが庁舎」大雪像の関係者や、遠くから訪れた外国の雪像作りチームへの取材も行いました。

## 6つの雪像から始まる

さっぽろ雪まつりの歴史は、1950年まで遡ります。かつて、大通7丁目広場は市民の雪捨て場でした。1950年、地元の中・高校生が大通公園に6つの雪像を設置し、スクエアダンスや歌謡コンクール、歩道に特設されたコースでドッグレース、雪合戦やカーニバルなど、さまざまなイベントが行われました。そして、5万人以上の来場者が訪れ、予想以上の大人気でした。それ以来、さっぽろ雪まつりは札幌を代表するウィンターイベントとして定着しました。1955年には、自衛隊が雪像づくりに参加し、大規模な雪像づくりに挑戦し始めました。第10回開催時の1959年には、さっぽろ雪まつりがはじめてテレビ、新聞でも紹介され、道外からの観光客が増え、大きな賑わいを見せました。

## 紹介する内容は？

- 1 さっぽろ雪まつりの由来とは？
- 2 今年の7丁目の大雪像に赤れんが庁舎が選ばれた理由とは？
- 3 赤れんが庁舎にはどのような物語があるのでしょうか？

## 国際的な雪まつり

大通会場11丁目の国際広場に足を踏み入ると、国際雪像コンクールに参加する海外チームが雪像を制作する様子を見ることができます。1974年に始まった国際雪像コンクールでは、世界各地の国・地域・都市によるチームが作った国際色豊かな個性あふれる雪像を楽しめます。また、国際雪像コンクールは、大通会場内で唯一、雪像の制作風景を間近で見ることができる大変人気のある行事です。



## ジョシュア・デヴォイ交流員の取材 ハワイチーム：「星に届け」

デール・ラドムスキーさんは20年にわたって、チームハワイのキャプテンとして活躍しています。2月5日、デールさんと2人のチームメイト、チャーリー・マツダさんとノリミツ・ワダグディーにインタビューしました。

チームハワイの3名はハワイのホテルで働いています。3名は11年前から毎年一緒に参加している国際雪像コンクールのベテランです。デールさんの参加きっかけは、シェフの仕事で氷の彫刻をしているうちに、より大きな雪像にも興味を持つようになり、さっぽろ雪まつりにチャレンジしたいと思ったことです。最初のころは十分な技術や熱意があるチームメイトを探すのに苦労しましたが、今は素晴らしいパートナーとともに雪像制作に取り組んでいます。ハワイの常夏の天気は有名ですが、雪がないの



©さっぽろ雪まつり公式HP

### ハワイチームの「星に届け」

で、雪像の練習機会は多くありません。「国際雪像コンクールは毎年難しい挑戦です。でも、私たちは今の素晴らしいチームで協力して取り組みます。」と、デールさんは言いました。

札幌での楽しみについて、「私たちは雪が大好きです。ハワイの天気はいつも同じだから、札幌の寒さもよい経験です」とも言いました。

## INTERNATIONAL SNOW SCULPTURE CONTEST

毎年、デールさんがチームに雪像の案を提案します。今年のチームハワイの雪像は、「流れ星と願い事」の感動的な話をモチーフにしました。デールさんの母によると、天に願い事をする、願い事は月と星の間まで飛んでいき、その願い事が流れ星となって戻ってくる時に、願い事が叶うのだそうです。

私は一般のハワイ人がハワイと北海道の交流のために活躍する姿に感動しました。札幌市民にもチームハワイの努力を見て、チームハワイのファンとなる人が多いそうです。



# ソン・ミンジン交流員の取材 大韓民国大田広域市チーム： 「夢見る旅」

寒い中、雪像の作業が行われていた現場で私たちが暖かく迎えてくれたのは、大韓民国大田広域市チームのキム・ミギョン大田彫刻協会理事長でした。韓国大田広域市のチームは、2010年から雪まつりに参加し、新型コロナウイルス感染症の不参加年度も含め、今年で16年目の参加となります。チームの構成員は大田出身の芸術家で、大学で彫刻授業も行うほどの専門家たちでした。

今年、大田広域市が作成した雪像のモチーフは「小さい少年が熱気球に乗って世界旅行に旅立つ」でした。キム理事長は「少年が旅に出るというシーンから、希望に満ちた前向きなメッセージを伝えたかった。子供たちの純粋な夢と冒険というモチーフを通じて世界とつながること、そして「夢」の大切さを象徴的に表現した。」と語っていました。

キム理事長は抽象的な作品を多く出すヨーロッパ圏の国や愛をテーマに「家族愛」を表現するタイやモンゴルなどを例に挙げながら、国際雪像コンクールでは視覚的な楽しみだけでなく、その国の世界観や民族の特徴も見つけることができるとして、多様な観点から国際芸術祭を楽しんでみることを勧めてくれました。



©さっぽろ雪まつり公式HP

大田広域市チームの「夢見る旅」

## ソン交流員の感想

インタビュー時は角張った雪の塊を一生懸命削っていた大田チームの姿が記憶に残っていましたが、インタビュー後に再び訪れた大田チームの雪像では、繊細で多様な感情を感じることができました。熱気球の中で顔をひょいと突き出している少年の姿からは冒険へのときめきを感じましたが、一方では「半分だけ突き出している」というところから、将来に対する心配と恐れも垣間見ることができました。加えて熱気球を囲む丸い雲は全体的には柔らかく、暖かい印象を与えますが、周りの視野を妨げる存在としても見え、夢というのは予測できない未知の世界を冒険することだという印象を受けました。将来が予測できなくても前に進み続ける。それが夢だということを、小さな少年の顔ににじみ出る純粋さや期待感と共に表現したのではないかと思います。



〈姉妹都市〉  
大田広域市(韓国)

**無料試食実施中!**  
무료로 신라면을 먹을 수 있습니다  
You can eat Shin Ramen for free  
可以免費吃辛拉麵  
可以免費吃辛拉麵  
สามารถกินชินรามีนได้ฟรี

**試食が支援に!**

現在 **15593** 杯

食べた分だけ世界の子どもたちの笑顔に繋がる!!  
ラーメンの発売元農心ジャパンは、スマイルリンクさっぽろ  
1杯につき10円を国連WFPの「学校給食支援」に寄付

**雪まつりに現れた  
「辛ラーメン」**

国際雪像コンクールに加え、今回の雪まつりでは海外企業の活躍も見られます。大通3丁目の辛ラーメンの無料試食は寒い中で特に人気! 熱々でピリ辛のスープが冷えた体に染み渡りそうです。



# 大雪像

## 「北海道庁旧本庁舎・赤れんが庁舎」

大通7丁目会場は、1974年から半世紀にわたり「国際交流広場」として海外の建造物を制作し続けてきました。今年の大雪像は、道民に愛されている「北海道庁旧本庁舎・赤れんが庁舎」でした。大雪像はHBC北海道放送株式会社及び北海道の提供により、陸上自衛隊北部方面システム通信群が作りしました。約3200名の自衛官が28日間かけて、この壮観な大雪像を完成させました。赤れんが庁舎の色に合わせ、制作時に雪像を赤く染めることで、昼間はよりリアルで迫力のある仕上がりになり、夜になると、カラフルなライトアップがされ、幻想的な雪像へ変わります。



## 赤れんが庁舎の歴史

赤れんが庁舎が国際交流広場の大雪像に取り上げられたのは、その歴史と深い関わりがあります。1886年、平井晴二郎を主任技師として、赤れんが庁舎の建設が着工されました。平井晴二郎は、文部省の第1回留学生として米レンセラー工科大学に留学し、帰国後、幌内鉄道の敷設に従事していました。32歳の時、平井晴二郎が道庁庁舎の設計に抜擢されました。

赤れんが庁舎は、米マサチューセッツ州議事堂をモデルとしたネオバロック様式のレンガ造りでの建築であり、建築資材には札幌軟石など道産品が使われています。レンガは、白石村（現・札幌市白石区）などで製造され、長手と小口を交互に積む「フランス積み」で、美しい壁面を生み出しています。

着工当時、初代北海道長官岩村通俊は、焼失した開拓使札幌本庁舎の八角塔を模した八角塔を屋上に設置するよう命じました。八角塔は独立と進取のシンボルで、明治政府の北海道開拓にかける意気込みを示しています。1888年、赤れんが庁舎は完成しました。

赤れんが庁舎の完成後、長い間北海道の拠点、道の中核としての役割を果たしてきました。それから数十年、赤れんが庁舎は年間70万人以上が訪れる北海道の代表的スポットとなる一方で、建物の内部・外部ともに老朽化が進んでいました。そのため、2012年から調査や計画策定、基本設計を行い、令和元年12月から耐震対策を含めた改修工事が開始されることとなりました。

2025年、6年間の改修工事の終わりに近づき、新たな赤れんが庁舎は2025年7月25日にリニューアルオープンします。そのため、半年後にオープンする赤れんが庁舎は今回の雪まつりに登場し、観光客に赤れんが庁舎の魅力を伝えるとともに、赤れんが庁舎の歴史と北海道開拓の歴史を紹介しています。





**本**道の開拓初期には、アメリカをはじめとする諸外国から様々な技術を吸収するため、多くの専門家が北海道に招かれ、その中にはケブロン米国農務長官や札幌農学校(現北海道大学)の初代教頭クラーク博士など、マサチューセッツ州出身者がおり、北海道発展の基盤づくりに大きく貢献し、道民の心にその存在を深く刻み込みました。

また、1968年に、130名の青年訪問団がマサチューセッツ州を訪問して以来、青年と女性の同州への派遣が継続的に実施されるようになりました。

1985年3月、マサチューセッツ州知事夫人(当時)の北海道訪問の際、先方より姉妹提携の申し入れがあり、1987年3月には、マサチューセッツ州側の民間交流促進団体として、「マサチューセッツ・北海道姉妹提携委員会」が発足しました。同年、先方からの招待状を受けて北海道知事がマサチューセッツ州を訪問し、州知事と姉妹提携に関する覚書を交わし、1988年1月、北海道大学学長等の呼びかけにより、「北海道・マサチューセッツ州交流委員会」が設立されました。

## 庁舎の保護と改修

今回の改修工事には、メタルシーリング保存修理工事、天然スレート保存修理工事、屋根銅板保存修理工事と耐震改修工事などが行われました。北海道総務部イノベーション推進局財産課の杉原主幹によると、改修工事において一番難しい作業は「改修」ではなく、「保護」です。130年歴史を有する赤れんが庁舎の改修工事は一般の建築物とは異なります。多くの改修は単なる増築や撤去ではなく、老朽化した部品を取り換え、現在使用している部品を適切に手入れし、元々の壁、床と天井をできる限り現状のまま維持することが求められます。

### 赤れんが庁舎修復の流れ

- 1896年:安全の理由から、赤れんが庁舎の八角塔が撤去
- 1909年:火災により赤れんが庁舎の内部が焼失
- 1911年:復旧工事を完了し、火災前と同様の機能に修復
- 1968年:北海道百年を記念して、創建当時の姿へ復元され、永久保存が決定
- 1969年:国から重要文化財に指定



## 色が変わる屋根



昭和43年秋(復原改修直後)

復原改修工事では、新しい銅板で屋根を葺いたので、赤褐色でした。



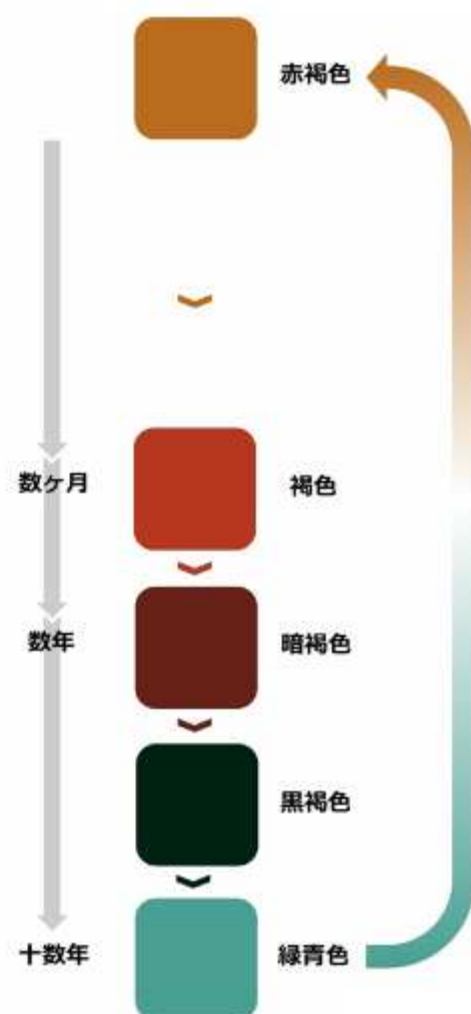
昭和44年秋頃

竣工の1年後には、既に落ちて着いた褐色になっています。



現在(改修工事前)

現在は、緑青が葺いており、青みがかった緑色です。



赤れんが庁舎の屋根の銅板は銅の経年変化により色が変わってきました。銅は、空気中の硫黄化合物や酸素、二酸化炭素、雨などの水分と反応して表面に安定した酸化皮膜が生じます。この酸化皮膜の化学反応が進むにつれ銅の色は変化し、最終的には緑青色になります。

## 赤れんが庁舎のリニューアル後の館内イメージ（展示基本設計概要）について

### 趣旨

北海道庁日本庁舎保存活用計画や赤れんが庁舎リニューアル基本指針で決定した各フロアのゾーニングや各部屋の展示構成などに沿って、館内イメージや各部屋のデザインを作成。

### リニューアル基本指針に基づくリニューアル後の館内イメージ



▲「リニューアル後のイメージ図」

## 赤れんが庁舎の新たな役割

改修工事後、新しい赤れんが庁舎には、北海道179市町村の地域魅力発信スペースをはじめ、北海道の遺産・文化、歴史とアイヌ文化、樺太の歴史や北方領土歴史などを紹介するスペースが設置されます。そのほか、地域の食文化を楽しめる飲食・休憩スペースや、お土産を購入できるショップもあります。道民により身近な存在となるよう、道民活動支援スペースやレンタル可能な会議室なども整備される予定です。また、今、**八角塔のバルコニーを一般開放することについて検討している**と、杉原主幹は述べました。その際には、訪れる人々が八角塔の上から庁舎の庭や、遠くまで続く札幌の街路を眺めながら、札幌の街並みの美しさを堪能できるようになるでしょう。

札幌市内を散策していると、いつも思わず目を奪われるのが、四季折々に美しく映える北海道庁日本庁舎の姿です。赤れんが庁舎は、北海道の歴史を語り継ぎながら、代々の道民が北海道を開拓する時の努力を見守ってきました。この夏、百年の歴史を持つこの建物が新たに生まれ変わります。絶景やグルメを通じて北海道ブランドを世界に発信し、国内外多くの観光客が訪れ、北海道ならではの歴史・文化、そして大自然の素晴らしさに魅了されることでしょう。そして、**北海道の人々が交流と連携を深めながら、共に未来を創り上げていく場** となることを願っています。

# 国際交流員が伝える 空知の魅力



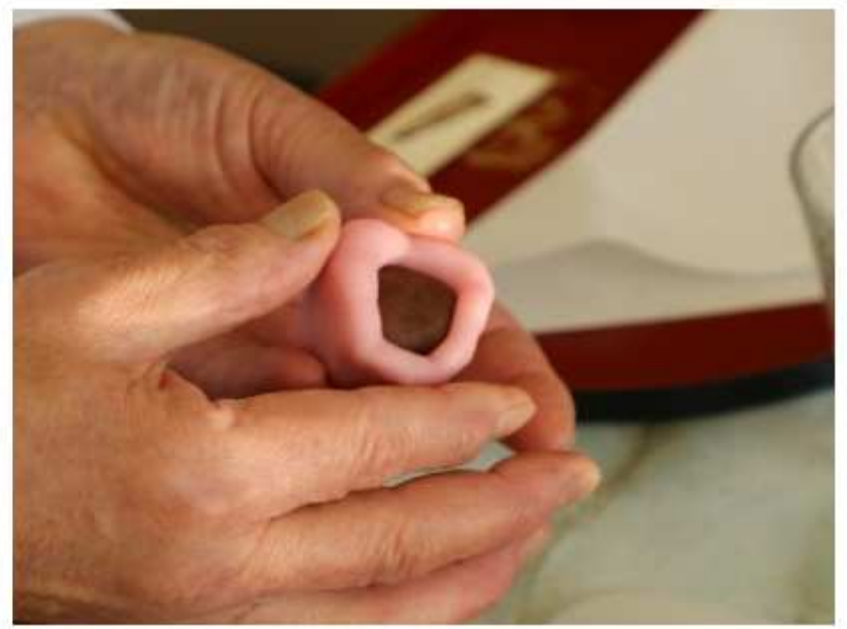
より詳しい内容はこちら！



## ジョシユア交流員「美唄スノーランド」

美唄スノーランドは日本最大級の広大な雪遊びフィールドです。スノーチュービングやバブルボールなど、子どもに人気のフリーアトラクションだけではなく、スノーラフティングなどの有料アクティビティも体験できます。ここではスキーやスノーボードができない方でも北海道の有名なパウダースノーを楽しめ、小さい子どもでも安全に遊ぶことができます。

美唄スノーランドからの景色は非常に美しいです。山々に囲まれている雪原を背景に、写真を撮影する絶好の機会が多くあります。また、大自然の中にあるスノーランドで野生動物を見ることができ、私は3時間で2匹の狐を見ました。札幌と近い美唄駅からの無料送迎もあり、車がなくても北海道ならではの大自然とパウダースノーを楽しむチャンスです。



## 于交流員「和菓子作り体験」

今回、和菓子作りを体験したお店は長沼町にある「森下松風庵」です。昭和25年に創業し、北海道産の食材を使い、長沼ならではの和菓子を作成し続けている老舗です。体験するのは、皆さんに大人気の「練り切り」です！練り切りは、さまざまな造形を作ることができるのが特徴です。

先生が笹切り菊を作る熟練の姿に、私たちは感動しました。和菓子とは、地元食材を活かして、四季に合わせて、小さなお菓子で自然本来の美しさを、視覚、嗅覚、味覚を通して再現するものです。森下先生のような和菓子職人は、美しい四季を感じる繊細な感性を持ち、毎日同じことを繰り返しながら、自分や周囲の環境を理解し、生活に密着した和菓子を作り出しています。

## ソノ交流員「小林酒造」

小林酒造は147年の歴史を誇り、100%北海道産の米を使用することで、北海道ならではの独特な味わいを生み出しています。この特別なこだわりが、他の酒造とは一線を画しています。

記念館では、小林酒造の歴史や醸造過程について学べる展示があり、また実際に酒を試飲できるコーナーも完備されています。特にシーズン限定製品の「冬花火」は、口に含むと花火のように弾ける感覚があり、香り高い余韻が残ります。その他にも、小林酒造ならではの魅力的なお酒が揃っており、実際にお酒を造っている施設も見学可能(要予約)なので、酒好きの方や日本酒に興味がある方にはぜひ訪れていただきたい場所です。





# 世界ふれあい広場



札幌国際交流館とJICA北海道(札幌)は地域住民に異文化との出会いを提供し、国際交流や国際協力に関心を持ってもらう目的として、昨年12月14日に世界ふれあい広場を開催しました。500人以上のお客さんが集まり、様々な国際体験をして楽しみました。

私たち国際交流員3名も世界ふれあい広場に参加し、母国(イギリス・中国・韓国)の伝統的なゲーム体験を行いました。国際交流員の説明を聞いて、日本にはないゲームを体験でき子どもも大人もとても楽しんでくれました。また、私たちは北海道の姉妹友好地域を紹介するパネルを掲示しました。ゲーム体験を待っている多くの方々がパネルに興味深そうに見てくれて、北海道の国際交流について広く紹介することができました。

皆さん、韓国の総人口の9割は家に「キムチ冷蔵庫」を持っていると知っていますか?ゲーム体験以外にも、ソソ交流員が主催した韓国〇×クイズでは多くの方々が楽しみながら韓国についての理解を深めていました。ほかにもミニドイツ語学レッスンやフィンランドで生まれたスポーツの「モルック」、トルコやベトナムの美味しいグルメもありました。このような活動をとおして異文化をもっと知りたい方は、2025年の世界ふれあい広場に是非行ってみてください!



# 黒竜江DAY開催



春節に近づく中、北海道が主催し、札幌大学と(公財)北海道国際交流協力総合センターが共催する「黒竜江DAY 公開講座～中国の文化と黒竜江省～」が1月12日(日)に、札幌大学国際交流センター(SUICC)にて開催されました。講座では札幌大学于(ウ) 暁爽(ギョウソウ)先生が中国の春節文化の紹介し、来場した皆様に中国の特別な年越しを知っていただきました。そして、黒竜江大学の留学生張(チョウ) 雪児(セツジ)さんが黒竜江省について紹介し、国際交流員于(ウ) 柳青枝(リュウセイシ)が北海道と黒竜江省の友好交流のあゆみについても説明しました。最後に、黒竜江大学の留学生である張(チョウ)雪児(セツジ)さんと姜政宇(キョウセイウ)さんが、于交流員と中国の南北における地域差を座談会の形式で紹介を行いました。座談会では衣食住や生活の様々な面で南北差を語り、三人のユーモアあふれる話に会場は大いに盛り上がりました。

また、1月6日(月)～1月12日(日)の間、札幌大学中央棟1階にて北海道と黒竜江省の友好のあゆみに関するパネル展示を実施しました。両地域1986年友好提携を結んだ以来の交流歴史を紹介し、代表的な交流活動として原正市さんの取り組みやカーリング交流の様子を伝えました。さらに、黒竜江省の最新観光情報についても展示し、多くの方に関心を持っていただきました。



## DAY事業とは

北海道は、1980年のカナダ・アルバータ州をはじめとして、アメリカ、中国、韓国、ロシア、タイ王国の地方自治体と姉妹・友好提携を結んでおり、これらの地域とは、互恵の精神のもと、教育、文化及び経済など幅広い分野での交流が行われ、北海道の国際化の推進に大きな影響を与えてきました。これらの地域と、より一層交流拡大を図るため、姉妹・友好提携日を記念日として、各提携地域の名前を冠したイベントを開催し、姉妹・友好提携地域等との交流プロモーションを行っています。

# Jet spotlight



300人以上のJETプログラム参加者が世界各国から北海道にやってきて、国際交流事業で活躍しています。今回の赤れんが通信では、イギリスから来ました外国語指導助手(ALT)クリス・バーカーを紹介します。

## 1. JETプログラムに応募した理由を教えてください。

昔からさまざまな文化や子どもたちと接することが好きなので、その両方ができるJETプログラムに応募しました。私はずっと日本にいた予定ではありませんが、外国に長く住んで、日常生活を経験し、その国に馴染んだような気持ちになれるのは素敵なおことだと思います。JETプログラムは、そのような経験をさせてくれる数少ないプログラムのひとつです。

## 2. JET参加者としてどのような活動をしていますか。

空知総合振興局管内岩見沢市に住んでいて、3つの学校(うち2つは小学校、1つは中学校)で英語を教えています。私にとっては、3校は勤務先の生徒たちや職員の皆さんのことをよく知ることができる規模です。業務内容は、それぞれの学校によって大きく異なります。1つの小学校では、日本人の担任の先生と一緒に授業の計画から作っていますが、もう1つの小学校では、日本人の先生をフォローする助手のような役割をしています。中学校では、発音指導のような、より一般的な中学校・高校でのJETの業務を行っていますが、日本人の先生たちが他にも私にできそうな仕事を頼んでくれることも多いです。

## 3. イギリスと日本、北海道の違いについて教えてください。

イギリスのチーズが恋しいです。北海道の食べ物はもちろん美味しいですが、ここでは出会えない故郷の味もあります。ほとんどは、食パンやチョコレートのような、ありふれたものなのですが。

日本に住んでみて、特に素敵だと思うところを1つ挙げるとすれば、日本の皆さんが持っている地元や日本という国に対する愛着と、土地に紐づくアイデンティティの強さかもしれません。私がこれまでに会った日本人の皆さんが、「外から来た人たち」に関心を持ちながら、それでいて敬意を込めて接しているところも、素敵だと思います。このように「外の人に敬意を持って接する」ための教育は、小学校の段階で既に始まっているように感じます。このような態度には、はじめこそ驚いたものですが、今ではいいものだと思うようになりました。



クリス・バーカー

出身:イギリス

所属:岩見沢の外国語指導助手(ALT)

## 4. 北海道での一番の思い出は何ですか。

1つだけ選ぶのは難しいですが、あえて選ぶなら、北海道の自然を体験したことです。来日したばかりの頃には、できたばかりの友人たちと一緒に大雪山や函館へ旅行に行きました。その友人たちとは、今では数年来の仲です。去年のゴールデンウィークには、ついに皆で知床半島に行き、知床五湖を見ることができました。言葉では言い表せないほどの感動でした。どんな人にもおすすめしたい体験です。

## 5. 岩見沢市のどんなところが一番好きですか。

JET参加者にとって、岩見沢市は人との交流にぴったりの場所です。岩見沢市は、市というより大きな町のようなところで、JET参加者が11人も住んでいます。優しい同僚たちもいて、よくある仕事終わりの英会話教室やクラブ活動もあるので、仲良くなろうと努力さえすれば、人と交流する機会は多くあります。私はそれなりにできるスポーツがバドミントンしかないなので、バドミントンのグループに入りました。

学校では出会えない日本人と出会うことができる機会でもあり、楽しいですが、同時に厳しい現実も思い知らされました。いざ皆さんと試合をしてみると、私に勝ち目はないようです。(日本の皆さんは趣味にも本気なのですね。)

# ALOHA SPIRIT

## を伝える スマイルアンバサダー

国際交流員以外にも北海道と外国を結ぶ存在が居ることをご存知でしたか？ それは「ほっかいどう応援団会議・スマイルアンバサダー」！スマイルアンバサダーは海外で北海道の魅力を発信、宣伝をしてくれています。今回はハワイでスマイルアンバサダーとして活躍されているレイコ・T・ロジャースさんにお話を伺いました。



### ? レイコさんとはどんな人？

レイコさんは現在、ほっかいどう応援団会議・スマイルアンバサダーとマラマハワイ北海道の代表を務められ、ハワイのラジオスタジオから「ISLAND BREEZE from HAWAII(アイブリ)」というラジオチャンネルやSNSを活用して、ハワイと日本に両地域の魅力や情報などを発信し、ハワイと北海道の架け橋として活動されています。



### ? 「アイブリ」はどんな番組？

文化、言語、経済、政治、観光など、様々な情報を取り扱っているほか、地元の方取材して紹介。日本からハワイへ移住し、英語で国語、科学、算数などを教える日本人小学校の先生の話などがリスナーさんから好評だったそうです。



### ? 積極的に情報発信をする理由は？

「情報が人々との大切な絆を作ってくれるという信念があるからです。コミュニケーションにおいて重要なのは情報であり、その情報を通じて多くの人々が縁で繋がり、皆さんの人生が豊かになることを願っている。」と話しながら、好奇心旺盛な性格もその原動力の一つだと付け加えられました。



### ? スマイルアンバサダーが思う、ハワイの一番の魅力は？

ハワイの一番の魅力は人。「アロハスピリット」にあると強調。アロハスピリットは幸せと喜びを分かち合う精神のことで、ハワイの多文化、多民族、多宗教が互いにハーモニーを成して生活できるのは、こうした、人を認める気持ちがあるから。ハワイはよく「サラダボウル」に例えられるが、多様な材料が本来の形のまま調和を成すように、移民もハワイでありのままの姿で生活していけると説明されました。



### ? 最後に、今後の活動の予定は？

北海道とハワイがより広い分野で交流されることを願っており、団体や国家間の交流だけでなく、人と人を繋げたいと思っている。そのための環境づくりに貢献できるように、積極的な活動に臨むとお話いただきました。